

研究テーマ	伊勢崎銘仙の新たなイメージづくり
研究者・団体名	四ツ葉学園地域歴史研究会
研究要旨	<p>本研究は、伊勢崎銘仙を中心に、母校四ツ葉学園のある伊勢崎市の活性化を図ることを目的とする。現代社会では、私たち高校生を含め、日常生活で着物に触れ合う機会が殆どない。また、伊勢崎市は、市外からの移住者数が県内有数であり、地域の歴史に馴染みのない人も少なくない。実際、私たちの行ったアンケートの調査結果によると、10 歳未満や 30 代から 40 代の伊勢崎市民は伊勢崎銘仙の名前を知っている程度で、深く理解していないことがわかった。背景として、現在の伊勢崎市は平成 17 年に赤堀町、東村、及び境町と合併して成立したものであり、現在も合併前の地域内での結びつきが強い。また、市内中心部では、開発により風情あるまちは壊され、銘仙で栄えた当時の姿を感じさせる建物が点在するのみである、といったことが挙げられる。</p> <p>しかし、伊勢崎市は世界遺産田島弥平旧宅や伝統的工芸品伊勢崎緋をはじめ、絹に纏わる深い歴史がある。「世界遺産のあるまち」、「伝統的工芸品のあるまち」であるにもかかわらず、これらが市民に知られていない現状は誠に遺憾である。だが、アンケート調査結果によると、地域の歴史を学びたいと興味を持つ市民は多くいる。そこで私たちは、子どもやその家族をターゲットに、伊勢崎の歴史を高校生の視点で伝え、歴史を身近に感じられる遺産に触れる機会を増やすことを活動の中心に定めた。具体的には、伊勢崎駅前の再開発構想に合わせ、伊勢崎銘仙を着て歩きたくなるような中心市街地の写真や、市内各地区の歴史的史跡や観光名所をまとめたパンフレットの作成、田島弥平の生涯をテーマにした小説の作成、伊勢崎駅前月に 1 回開催されるいせさき楽市(伊勢崎市、伊勢崎商工会議所、群馬伊勢崎商工会、まきばプロジェクト主催)での伊勢崎銘仙の PR 活動を行った。まちづくりは数十年かけて築かれるものだ。しかし、その第一歩として私たちの活動が地域を盛り上げる契機となることを切に願っている。</p>
研究内容	
<p>目次</p> <p>第 1 章 研究目的</p> <p>第 2 章 伊勢崎市の織物の歴史</p> <p> 第 1 節 古代</p> <p> 第 2 節 近世・近代</p> <p>第 3 章 伊勢崎の文化都市としての魅力を伝えるための私たちの活動</p> <p> 第 1 節 伊勢崎市の現状と課題</p> <p> 1. インターネットでの調査結果</p> <p> 2. アンケート調査結果</p> <p> 第 2 節 まきばプロジェクトへの参加</p> <p> 第 3 節 桐生市及び秩父市への訪問と伊勢崎市の現状について</p> <p> 1. 桐生研修</p> <p> 2. 秩父研修</p> <p> 第 4 節 パンフレット・小説制作</p> <p>第 4 章 私たちの活動の成果と課題</p>	

第 1 章 研究目的

私たち四ツ葉学園地域歴史研究会は、総合的な探求の授業から派生した歴史研究を志す生徒の集まりだ。研究テーマを探る中で「絹ラボ」を知り、地元伊勢崎の伝統工芸品「伊勢崎銘仙」を活用した街づくりの提案ができないかと考えた。当初、伊勢崎銘仙固有のデザインをデータ化して販売すること等を検討したが、改めて伊勢崎市の課題を分析し、より地域に密着した実現可能な活動を行うこととした。

第 2 章 伊勢崎市の織物の歴史

私たちはまず、群馬県や伊勢崎市の織物の歴史について調査することから始めた。調査手段としては、史跡や博物館等への訪問、文献調査を主とした。伊勢崎市の歴史の中で、織物は古代より重要な立ち位置にあったことがわかった。伊勢崎市の織物の歴史はどのようなものだったのか。

第 1 節 古代

弥生時代に大陸より日本に織物の技術が入った。その証拠に、静岡県登呂遺跡など全国の大規模集落跡から織機が出土していることが挙げられる。伊勢崎市で、織物が行われていたことが確認できる最古の例は弥生時代から古墳時代頃に遡る。弥生時代の遺跡である西太田遺跡からは紡錘車が 4 点出土している。また、6 世紀の淵名の古墳からは麻の織物片が出土した例がある。この地域には倭文神社が鎮座している。倭文神社は織物の神といわれる「倭文神」を祀る神社で、古来より地域の人々から崇拝されてきた [松田昇, 2005]。また、古墳時代の人々の生活をよく表す埴輪から、織物が既に始まっていたことが窺える。伊勢崎市では日本を代表する埴輪が多数出土している。特筆すべきは人物埴輪である。豊城町から出土した全身を着飾った正装女子埴輪、正装男子（いずれも国指定重要文化財）や安堀古墳から出土し、国宝との類似性が指摘される挂甲武人埴輪など、伊勢崎には古くから進んだ技術を持った豪族がいたことがわかる。古墳時代は、大陸の技術が本格的に取り入れられ、広い地域で実用化が進んでいった。大陸の技術は主に九州からヤマト王権に渡り、地方豪族に伝播していった。埴輪等出土品から伊勢崎の地域はヤマト王権との関係が強く、織物の技術も進んで取り入れていた可能性が高い。飛鳥時代以降、日本では中央主権化が進んだ。701 年に大宝律令が制定され、日本中に律令国が置かれた。地方の律令国は京へ税を納めることが義務付けられた。地方はその地の特産品を納めていた。現在の群馬県にあたる上野国は絹織物を特産品として献上していた。正倉院宝物の中に、上野国から献上された揩布屏風袋がある。それには現在の伊勢崎玉村地域にあたる佐佐郡と書かれており、この地域で織られたものが、遠く京まで渡ったと考えられる。伊勢崎の絹織物が活発的になったのは江戸時代からだが、織物の地域として 1000 年以上の伝統があることが窺える。

第 2 節 近世・近代

伊勢崎の織物は江戸中期の享保年間から、伊勢崎緋と伊勢崎太織の名で呼び声高くなっていた。この頃から伊勢崎での養蚕も盛んになった。江戸時代での養蚕は年 1 回の飼育であり、蚕を飼う時期はちょうど麦刈りや田植えと農家にとって年間を通じて最も多忙な時期と重なっていた。そのため、男は力仕事、女は養蚕という分業体制が完成した。当時、畑の年貢は水田に比べ格段に低く、養蚕は可処分所得が多かったため、女性が養蚕、糸挽、機織りと活躍することは農家の経済状況を潤すことに一役買い、ここに「かかあ天下」という言葉も生まれた。

そんな中、宝暦 8～9 年（1758, 9）に絹・糸運上騒動が起こる。江戸幕府では元禄元年（1698）と宝暦 9 年（1759）に上野・武蔵の絹に対して課税を行う計画が立てられ、これに対し、伊勢崎や桐生の生産者たちが強く反対した。桐生では、勘定奉行石谷備後守清昌と反対勢力の間で和議が結ばれ、落ち着いたのである。この時、伊勢崎は 2 代藩主酒井忠告の治世であった。このように養蚕が盛んになると市には商人が集まり、売

買を世話する絹宿が、村方には織物製造を行う元機屋が現れるようになる。元機屋は自己資金で糸を買い付け、それを自ら、若しくは紺屋に依頼し、糸に指定の縞柄をつけ、農家に機織りを依頼した。織りあがった製品は元機屋で仕上げられ、市の絹宿を経て江戸や京の呉服問屋へ送られた。弘化4年(1847)、伊勢崎藩領内には大小70軒ほどの元機屋があった。初期の頃の太織は縞柄がほとんどだったが、弘化年中頃には馬見塚村出身の鈴木マチによって、十字や井の字の図案を織り込む技術が確立した。これが大紺の起源とされる。紺は元機屋の出現に伴う作業の分業化により、量産化が可能となった。

伊勢崎の中でも、境島村は有数の養蚕地であり、田島家も利根川流域での稲作が難しいことから、養蚕農家へ転向した一家であった。かつては田島彌兵衛が自然育を行っていたが、自宅蚕室が天保7年(1836)に焼失したことを契機に温暖育へ切り替えた。しかし、蚕の生産を上げるため、田島彌兵衛、弥平(当時邦寧)親子は諸国行脚を行い、その道程で米沢では主流であった、自然風を活用した自然育に着想を得て、自然育の改良に努めた。安政3年(1856)に納屋を改良して蚕室とした後、翌年、換気のための窓(抜気窓、櫓)を据え付けた。また、自身の居宅も2階部分も蚕室として改良し、初の総櫓住宅となった。今でも島村には総櫓住宅が残り、島村式蚕室とも呼ばれている。弥平はこの2つの蚕室が完成した文久3年(1863)にそれらを「桑柘園」と命名し、彌兵衛と弥平による自然育、清涼育が大成したことを意味していた。

幕末の天保、嘉永の頃には遠く京・大坂や江戸の越後屋呉服店が、伊勢崎に出向くほど品質は向上し、生産も増大していた。明治時代になると、新政府によって明治3年、養蚕奨励が布告され、4年に田畑勝手作の承認が行われると、蚕種用養蚕が急速に発展し、利根川沿いの村々に桑園が拡大し、長沼や国領、柴町などの大規模養蚕農家では季節労働者を新潟県などから受け入れていた。ただ、明治維新をきっかけに城下町としての安定した発展は止まり、伊勢崎全体での産業は下火となる。

しかし、開港地横浜では幕末期から生糸貿易が活発となり、近接地桐生では織物産業を中心とした商工業が著しく発展していた。ただ明治時代初期に、ヨーロッパにおける微粒子病が一段落すると、蚕種の輸出量は減少していった。また、粗悪品の氾濫により、日本の蚕業への信頼は低下していた。大蔵省はこれに対し、明治5年(1872)2月に蚕種の質を確保するため、各府県の代表的な蚕種家を「蚕種大総代」に任命し、大総代会議を通じて規制を行うこととし、群馬県の代表として、田島弥平、田島武平の両名が選ばれた。結局、蚕種大総代制は、明治8年(1875)3月4日に廃止となったが、それまで弥平は「養蚕検査表」の導入に尽力するなどの功績を残した。明治7年(1874)までには横浜に大量の蚕種が持ち込まれていたが、ヨーロッパ商人に売り込んでいた横浜の商人は、値崩れを抑えるために大量の蚕種を廃棄していた。そこで田島弥平ら島村の養蚕農家は、三井物産や渋沢栄一らの協力の下、イタリアへの直輸出を模索し、実際にミラノにわたって直接販売にこぎつけている。この際、島村の養蚕家が中心となって会社を興した。それが、蚕業に関する会社としては日本初だった島村勸業会社(1872年設立)であり、田島武平が社長、弥平が副長(副社長)の1人に就任していた。

明治13年(1880)に県令楫取素彦宛に、鈴木浅治、下城弥一郎、森村富蔵ら8人の連名で、伊勢崎太織会社の設立願いが出されている。これは粗悪品の乱造を防ぎ、より一層の織物業盛大を目的としたことだった。この願書は、この時はまだ会社条例が制定されていなかったもので、制定まで任意とするよう、群馬県大書記官森醇の名で印が押され、返却された。この折、金子堅太郎や、渋沢栄一、渋沢喜作などの人々も斡旋に力があつたのだという。明治19年に初代下城弥一郎が組合長となり、織物専門の市場を作るとともに、織物講習所を設置、東京蔵前の高工から教師を招集するなど、品質の向上と、技術者の育成に尽力した。この学校運営のために初代下城弥一郎は私財を抵当に入れたという。織物講習所は明治29年に伊勢崎染色学校となった。太織会社は明治18年に織物業組合、22年に織物組合、27年に織物商工組合、32年に織物協同組合と発展をつづけ、織物業は伊勢崎の基幹産業となっていった。明治20年代に太織縞は「銘仙」の呼称により大衆性を確保した。銘仙という名は日本橋南伝馬に開業した伊勢崎織物紹介が起源といわれている。

嘗て太織は養蚕農家の農閑期の副業としてつくられた手製の物であったが、明治中期には機巻、糊付、整

経、撚糸などの行程も分業となった。織機も明治 20 年代以降は居坐機から高機になり、明治末期には力織機も導入され、一部は工場化されるが、生産の大半は農家の賃機に因るものであった。伊勢崎織物は昭和 5 年（1930）に生産のピークを迎えるが、その後は世界恐慌の影響や、統制経済の影響を受け、減産していき、戦後の一時期僅かに増産した。昭和 30 年代初に銘仙は大衆着から姿を消し、伊勢崎でもウールの生産が始まった。

第 3 章 伊勢崎の文化都市としての魅力を伝えるための私たちの活動

伊勢崎を訪れる人の流れは商業施設などに偏っているが、伊勢崎には第 2 章で述べたように、誇るべき歴史や文化遺産がある。このような魅力ある市であるにもかかわらず、それがあまり世間に知られていないのは実にもったいない。そこで私たちは、伊勢崎の文化都市としての魅力を伝えるために活動を始めた。

第 1 節 伊勢崎市の現状と課題

伊勢崎市の課題を見つけるために、RESAS（地域経済分析システム）などインターネットで情報収集をするほか、独自にアンケート調査も行った。

1. インターネットでの調査結果

伊勢崎市は平成 17 年に旧伊勢崎市に赤堀町、東村、及び境町と合併して成立した。伊勢崎市は関東平野の北西に位置し、前橋市、高崎市、太田市の県内での総人口数トップ 3 の市に面している。国道や高速道路の開通に伴う、交通の利便性の向上により、商工業が盛んな地域となった。

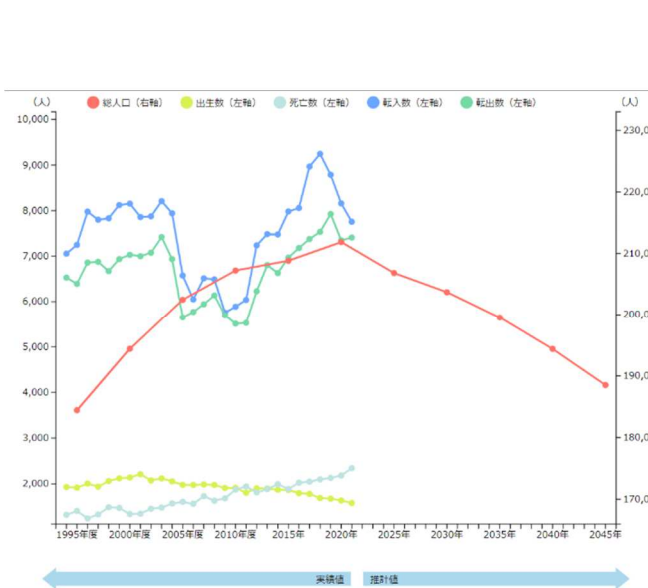


図 1 伊勢崎市内の 1994 年度以降の転入者数と転出者数の推移 (RESAS より)

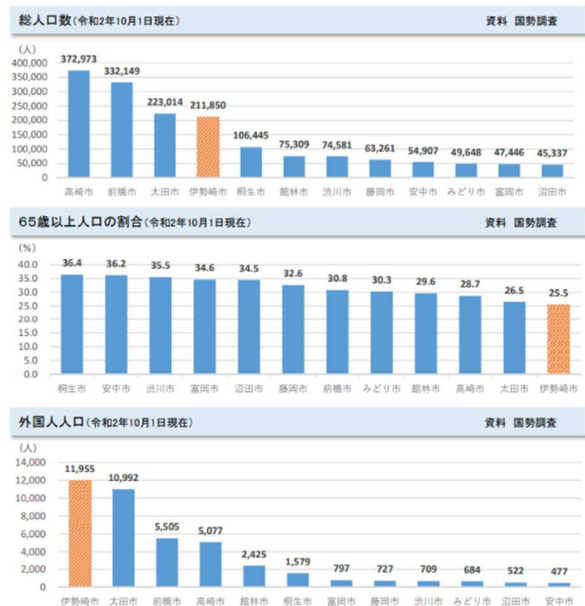


図 2 伊勢崎市の人口構成 (伊勢崎市ホームページより)

伊勢崎市の総人口数は県内第 4 位であり、約 21 万人を有する。人口構成は図 1、図 2 からわかる通り、65 歳以上人口の割合が県内の市では最も低く、労働人口が多くを占める。一方、外国人人口は県内随一であり、多くの外国人労働者を抱えていることが窺える。図 1 によると、1994 年度以降、一貫して転入者数が転出者数を上回る状態が続いている。伊勢崎市の「平成 18 年から平成 27 年の伊勢崎市に関わる人口の移動の状

指定地域の目的地一覧

群馬県伊勢崎市
2022年3月（休日）
公共交通

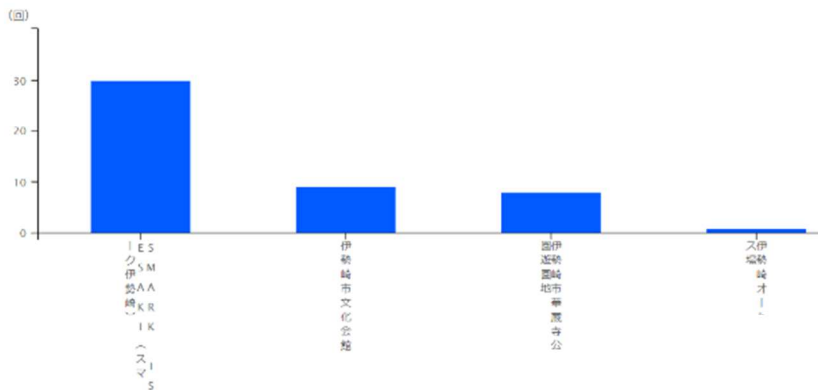


図 3 経路検索回数ランキング (RESAS より)

遊園地である。この調査は、公共交通機関を交通手段とした検索を集計対象としているため、伊勢崎駅からバスで直接向かうことが可能なこの3か所が多く検索されたと考えられる。図4は同様の条件での埼玉県秩父市の目的地ランキングを示している。秩父市は伊勢崎市と同じく銘仙五大産地に数えられる「銘仙のまち」だ。

グラフより伊勢崎市と大きく違うところは検索件数で、伊勢崎市1位のスマーク伊勢崎は約30件なのに対し、秩父市1位の三峯神社は100件を超える。また、伊勢崎市は駅から歩きでは行けない目的地が多いが、秩父市は2位から5位がすべて駅周辺の場所だ。伊勢崎市は商業施設や遊園地が上位なのに対し、秩父市は神社などの歴史スポットが数多く検索されていて、文化財を目的に訪問する観光客が多いことが窺える。秩父市がホームページに掲載している観光モデルコースには、秩父神社、秩父今宮神社にちちぶ銘仙館が組み込まれていることも、観光を目的として訪問する人を増やす一因であろう。伊勢崎市で主に検索されている場所は、地域独自性が少なく、観光客が多く検索サイトを利用しているとは考えられない。課題は、玄関口である伊勢崎駅を降りた人が、駅周辺には魅力を感じず、郊外に流れているということだ。秩父市は対照的である。

指定地域の目的地一覧

埼玉県秩父市
2022年3月（休日）
公共交通

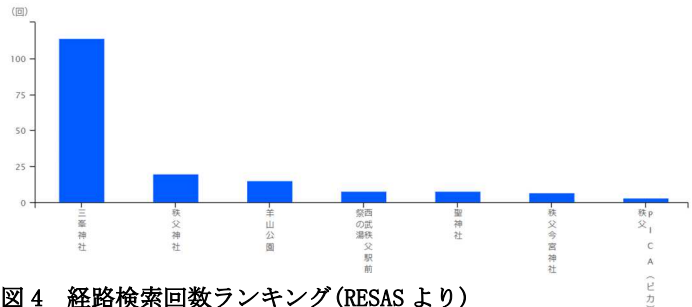


図 4 経路検索回数ランキング (RESAS より)

伊勢崎銘仙に関するアンケート

私たちは伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校の地域歴史研究会と申します。この度、上毛新聞社主催の「綱ろぼ」という大会に応募する予定です。その活動の一環として、皆様のお見聞かせたいと思っています。ご協力よろしくお願い申し上げます。

- ご年齢
A 10歳未満 B 10歳代 C 20歳代 D 30歳代 E 40歳代
F 50歳代 F 60歳代 G 70歳以上
- お住まい
A 市内 B 県内 C 県外(都道府県) D 国外
- 伊勢崎銘仙について知っていますか。
A よく知っている B 名前は聞いたことがある C 知らない
- 3でAと答えた方に質問です。どこで知りましたか。
()
- 伊勢崎銘仙で作られたものを持っていますか。
A 持っている B 持っていない
- 伊勢崎銘仙で作られた着物を着たことがありますか。
A ある B ない
- 6でBと答えた方に質問です。今後、機会があれば伊勢崎銘仙を着てみたいと思いませんか。
A 思う B 思わない C どちらともいえない
- 伊勢崎銘仙についてのイベントに参加したことがありますか。
A ある B ない
- 8でBと答えた方に質問です。今後、イベントがあれば参加してみたいと思いませんか。
A 思う B 思わない C どちらともいえない
- 伊勢崎銘仙についてご意見がありましたらご自由にお書きください。

2. アンケート調査結果

10月15日に伊勢崎駅前を中心として毎月（一部期間を除く）開催されるいせさき楽市に出店し、アンケート調査を実施した。10月15日はまちなか高校生フェスタも同時開催されていたため、多くの人でにぎわった。この調査では計147の回答が集まった。図5のアンケート調査結果を基に、年代別の伊勢崎銘仙の認知度や関心を分析した。図6より、伊勢崎銘仙は年代によって認知度に大きな差があることがわかった。具体的には、60歳代、70歳以上においては広く認知されている一方、10歳未満や20～40歳代においては認知度が著しく低いことがわかる。

図 5 アンケート用紙

ここから、伊勢崎銘仙をよく知らない世代は、主に伊勢崎市との関わりが少ない世代だと考える。先述の通り、伊勢崎市は転出者数を転入者数が上回る状態が続いていて、特に市外から伊勢崎市への転入者は、伊勢崎地区の市街化区域が最も多い。これらの事実より、伊勢崎市に住む 30 歳代から 40 歳代は市外から移住してきた人が多いため、伊勢崎市民であっても地域の歴史に馴染みがない人が多い可能性が考えられる。子どもについては、家族で市外から移住したことも理由の一つとして考えられるが、市内で子どもも楽しめる伊勢崎銘仙に関するイベントが少ないことも大きな理由として挙げられる。10 歳代での認知度が高かったのは、市内小学校の多くで伊勢崎銘仙に関する学習が行われていて、学習からさほど年月が経過していないことが理由の一つと考えられる。次に、市民の伊勢崎銘仙への関心は高いという結果が得られた。若者からは、伊勢崎銘仙を着たい、伊勢崎銘仙についてのイベントに参加したいという希望がありながらも、現在銘仙に触れる機会が少ないことがアンケート結果から課題として見えてきた。

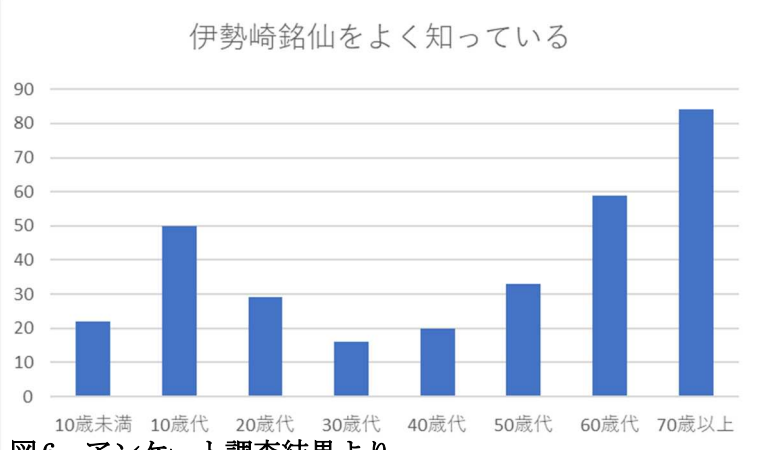


図6 アンケート調査結果より

私たちの取り組むべき課題は、特に伊勢崎市に住む子どもを持つ家庭を対象に、銘仙を中心に地域の歴史に興味を持てるような環境づくりをすることだと考えた。現在、そして未来に地域の歴史を伝承するには、人口の大部分を占める生産年齢の人々と、数十年後の伊勢崎を担う子どもたちが名前を知るだけでなく共に学べ、楽しめることが大切だと考えた。

第2節 いせさき楽市への参加

伊勢崎駅前広場を中心に毎月いせさき楽市というイベントが開催されている。屋外での安全な買い物の場づくりや中心市街地活性化を目的として行われているものだ。私たちはこのいせさき楽市に計3回出店し、地域住民との交流、伊勢崎銘仙についての意識調査、及び来訪者が銘仙と触れ合う機会をつくる活動を行った。私たちと同じく伊勢崎銘仙を活用した地域活性化を行っている銘仙のまち伊勢崎プロジェクトとコラボレーションにより規模を拡大して活動した。以下各回毎の活動の詳細を記す。

〈第1回 10月15日開催 銘仙についての意識調査、クイズ企画、銘仙の端切れを使用したしおり配り〉



図7 アンケート調査の様子



図8 クイズ企画の様子

初めて参加したこの回では、図7のように、来訪者の伊勢崎銘仙に関する意識調査を行うとともに、伊勢

崎銘仙に関するクイズ企画や、伊勢崎銘仙の端切れを使用したしおりの配布で、銘仙文化の伝承を試みた。意識調査では第 1 節のような研究に活用した。ここから県民は伊勢崎銘仙へ高い関心を持っていることが分かった。図 8 のように、クイズ企画を同時に開催した。複数の難易度を設定したことや GoogleForm での回答受付を行ったことで、老若男女問わず多くの参加がみられた。クイズ企画を行った方々には伊勢崎銘仙の端切れを使用したしおりを配布した。配布したしおりなど伊勢崎銘仙を取り入れた小物を指定の店舗で提示すると特典を受け取れるように取り計らったこともあり、多くの方々にしおりを受け取っていただくことができた。このように、伊勢崎銘仙の PR と並行して、市街地の魅力ある商品を発信した。しおりは日頃から活用できるものなので、着物を着用する機会のない日常生活であっても伊勢崎銘仙を身近に感じることができた。また、幅広い世代が参加しやすいクイズ企画を通して伊勢崎銘仙に関心を持っていただき、特典付きのしおりを配布することで、まちおこしに貢献できた。

〈第 2 回 11 月 19 日開催 着物・羽織着付け体験の開催、パンフレット試作品の配布、研究内容の展示〉



図 9 集合写真



図 10 伊勢崎銘仙コーディネート体験

この回ではメンバー全員が伊勢崎銘仙を着用して活動した。そしていせさき銘仙の会代表世話人で伊勢崎銘仙に造詣の深い、杉原みち子様のご協力をいただき、伊勢崎銘仙のコーディネート体験や、羽織体験を行う企画を行った。体験会場の隣では、銘仙のまち伊勢崎プロジェクトが親玉商店様と赤城せんべい本舗様の商品を販売した。この回では、図 10 のように銘仙を身につけていた写真を撮ることで特典が受け取れる企画を行った。参加者が銘仙を身につけている最中、伊勢崎銘仙の解説を行い、歴史の伝承を図った。着付け体験の参加者の大半は子ども連れの家だった。このことは、若年層が伊勢崎銘仙に対し強い関心を寄せているという私たちのアンケート調査結果と共通の結果が得られた。しかし、参加者は前回は下回った。これは、無論同時開催の大きなイベントが無かったことや、小物のコーディネートに長時間を要することも要因と考えられる。しかし、女性向け着物を多数用意し、いせさき楽市自体には多くの女性が来場していたにもかかわらず、このような結果に終わったのは、そもそも伊勢崎銘仙を知っている人が少ないがために、興味をそそられなかった可能性もある。また、伊勢崎の美しい景色や文化的価値のある場所を紹介するパンフレットを制作途中であったが、配布をした。いせさき楽市が開かれている駅前周辺の歴史資産に足を延ばしてもらうことが狙いだ。いせさき楽市を視察されていた下城賢治副市長御一行様に私たちの活動を紹介し、激励をいただいた。

第 3 回 12 月 17 日回 伊勢崎神社でのパンフレット試作品の配布、活動内容の展示)

12 月回では銘仙のまち伊勢崎プロジェクトの代表の高山華代様にご協力をいただき、11 月回から改良を重ねたパンフレットの試作品を伊勢崎神社で配布した。また、パンフレット制作時にご協力いただいた、茂木園様、松露庵様、赤石屋様に直接試作品をお渡しした。さらに、これまでの活動報告や研究会の成果を境内にパネルとして展示した。この日は同時に伊勢崎銘仙ワークショップが開かれていたこともあり、多くの人が参詣し、用意した分のパンフレットはすべて配布することができた。

第 3 節 桐生市及び秩父市への訪問と伊勢崎市の現状について

私たちは、伊勢崎市の魅力を上げるために、同じ絹産業で栄えていた都市の中でマーケティングに成功していると考えられる桐生市、及び埼玉県秩父市を訪問し調査を行った。

まず、桐生市と秩父市の共通点は景観保護に努めていることだ。例えば道路の石畳化の推進、古い町並みの保護、銘仙に関する体験事業、銘仙を用いたポーチやハンカチ、しおりなどの販売である。桐生市や秩父市は、織物のまちであることを視覚的に伝えたり、着物をリメイクした小物を販売したりすることで、地域に銘仙の文化を継承していた。また、体験事業に積極的だと感じた。例えば桐生市の織物参考館・紫では藍染体験ができ、桐生織物記念館では織機を扱う体験をすることができる。また、西武秩父駅から徒歩 5 分の場所にあるちちぶ銘仙館では、小中学校の校外学習先として、体験学習が行われていた。更に、より専門的な技術を継承するための取り組みも見られた。

1. 桐生研修

桐生市は景観保護について、桐生らしさを守り洗練し後世に受け継ぐこと、生活景に配慮し日常の景観の質を高めること、市民全体のまちづくりを推進すること、以上の 3 つの基本理念を定めており、市民の景観保護への意識も高くなっている。無作為に選ばれた 3000 人の桐生市民を対象とした桐生市の景観に関するアンケートによると、歴史的な建物が景観上の特徴を有するものを保全することへの意識の高さが見られる。また、桐生市では桐生天満宮を中心としたまちづくりが行われている。桐生駅から桐生天満宮までの通りは本町通りと呼ばれる。本町通りは、のこぎり屋根が象徴的な旧曾我織物工場などがかつての姿を残すとともに、桐生有鄰館や桐生歴史文化資料館などでは、景観の保全に加え、歴史教育の場としての役割も果たしている。織物参考館・紫では明治 10 年創業の森秀織物が織機の展示と共に織物体験や藍染体験が行われている。のこぎり工場で体験できることは観光客を引き付ける施設となっている。また、桐生市では着物を着て歩きやすい環境づくりがされている。毎月第 1 土曜日に桐生おりひめ倶楽部主催の着付け体験が行われ、まち中を着物で楽しむことができる。桐生市の伝統的建造物群は、本町通り末広通りに位置する。これらの通りは商店街となっていて、グルメを楽しむこともできる。

2. 秩父研修



図 11 寺内様による展示解説



図 12 ちちぶ銘仙館外観

秩父市の本町と中町は特に重点的な景観保護が進められている。景観保護の共通基準として、歴史的な建造物の保存、派手な建造物や広告などの制限、駐車場などの外観への配慮などを行うことが挙げられる。本町の大通りに面するほぼすべての建築物はこの基準を満たしているため、建物に統一感がみられる。それに加えて、歩道の石畳化、電柱の地中化も進んでいる。ちちぶ銘仙館は秩父銘仙の資料の保存、収集、及び展示を行うとともに、技術の伝承を行う施設だ。旧埼玉県繊維工業試験場秩父支場本館（登録有形文化財）を改修している。ちちぶ銘仙館では寺内秀夫様の解説で見学した。特筆すべきは、体験型の歴史伝承を行っていることだ。展示エリアでは、織物の基礎知識から、秩父銘仙の特色まで広く紹介されていた。展示室の先には「手織り体験室」、更に「手織り実習室」と「染場・染め体験室」がある。手織り体験室は、主に観光客

や地域の小学生の教育に使用されている。地域の学校では、授業の時間を使ってちちぶ銘仙館でコースター制作をはじめ、手軽な織り体験を行うといった取り組みが行われている。寺内様によると、数人の小学生は授業での体験学習をきっかけに、夏休みの研究テーマに秩父銘仙を取り上げているようだ。子どもの積極的な学習が秩父銘仙の伝承につながるという。



図 13 手織り実習室の様子

また、秩父市では、現在も技術者がいることを活かして、技術を地域一体となって受け継いでいる。ちちぶ銘仙館では後継者育成事業が行われている。毎月 3 回、後継者の創出や育成を目的として染め・織りの基礎技術講習や着尺の製作を行っている。産地の即戦力となる人材育成をしているのだ。実習生は織物に興味を持つ一般の人々だ。講師は秩父市で今も織物業を営む技術者に委託することで、高い技術を若者に受け継ぐための仕組みが構築されている。

また、就業・起業者向けの「プロ志望者育成コース」も設置されている。こういった事業は、図 13 の手織り実習室と図 14 の染場・染め体験室での豊富な機具を活用して開催されている。このように秩父市ではちちぶ銘仙館を中心として、技術を受け継ぎながら、地域の人々の生活に秩父銘仙が溶け込んでいた。



図 14 ほぐり捺染の実習の様子

第 4 節 パンフレット・小説制作

第 1 節でも触れたが、私たちは伊勢崎の魅力を様々な人に知ってもらう活動の一環としてパンフレット制作を行った。このパンフレットは自ら写真を撮り、文章を書き、編集したものである。また、この制作活動を通し、私たち自身も伊勢崎というまちの魅力について再認識することができた。このパンフレットは、着物が映えるまちとしての伊勢崎市中心街の景色を写真で紹介する第 1 章と、伊勢崎市の地区毎の観光名所を歴史解説とともに紹介する第 2 章の 2 部構成となっている。

第 1 章では旧時報鐘楼や伊勢崎神社、相川考古館などの計 8 か所の写真を写真集のようなレイアウトで掲載している。私たち自身も伊勢崎銘仙を着てまちを歩き、伊勢崎の歴史を肌で感じる事ができた。第 2 章では伊勢崎市を旧市内、あずま地区、境地区、赤堀地区の 4 地区に区分し、それぞれの歴史解説と、観光名所を写真とともに記した。

また、伊勢崎市の歴史に子どもでも親しめるよう、蚕種の生産・流通に深く携わった田島弥平の生涯についての小説を制作した。小説制作にあたり、実際に田島弥平旧宅や、同じく絹遺産群として世界遺産となっている富岡製糸場を訪れて説明を受け、展示を見て理解を深めた。また、本校の社会科教員、国語科教員に添削を依頼し、正確且つ文学的な作品制作に努めた。これらは主に小中学生に向けて制作し、市内小中学校への贈呈が決定した。

第 4 章 私たちの活動の成果と課題

私たちは、絹ラボを通して、絹織物の歴史と地域への理解を深めると共に、歴史の伝承と地域活性化を行った。調査で訪れた場所は 8 か所、いせさき楽市への参加は計 3 回に及んだ。また、パンフレットと小説の作成を行い、市内図書館や県立博物館、市内小中学校等へ贈呈することが決定した。洋装化に伴い、伊勢崎銘仙が日常で着られることはなくなってしまった今、歴史を伝承するには若者に向けて情報を発信することがとても大切だ。図 5 のアンケート調査結果によれば、10 歳未満と 30 歳代から 40 歳代の人々には伊勢崎銘

仙が詳しく知られていないことがわかった。パンフレットや小説は、伊勢崎市の歴史を知るきっかけになることに加え、親子で歴史を楽しむことも期待できるのではないだろうか。また、着物に馴染みのない若者から伊勢崎銘仙に関するイベントに参加したいという要望が数多くあることがわかった。そうした需要に応えるべく、いせさき楽市で着物のコーディネート体験を開催した。洋装化が進んだ現代だからこそ、希少価値の高い着物を活用できるのではないだろうか。伊勢崎銘仙特有のデザインはまちづくりに活用すべきだと考えている。銘仙布のしおりを配布で地域の飲食店とコラボすることで、銘仙によるまちおこしの第一歩を踏み出すことができた。伊勢崎市民の日常と伊勢崎銘仙を一体とする仕掛けとして、新たな伊勢崎銘仙の伝承の形態を提示できたのではないだろうか。

最後に

- ・群馬県立世界遺産センター「セカイト」 普及調査主任 今井洋平様
- ・群馬県立歴史博物館 館長 右島和夫様
学芸員 佐藤有様
- ・伊勢崎織物協同組合 事務局長 矢島弘様
- ・伊勢崎市立赤堀歴史民俗資料館 館長 川道亨様
- ・ちちぶ銘仙館 寺内秀夫様
- ・富岡市 世界遺産観光部 世界遺産観光課
- ・伊勢崎市 産業経済部 文化観光課
商工労働課
- ・いせさき銘仙の会 代表世話人 杉原みちこ様
- ・銘仙のまち伊勢崎プロジェクト 高山華代様
小林香穂様
- ・かすり工房さいとう様
- ・株式会社 Ay 代表取締役社長 村上采様

また、調査をするために訪れた場所は以下の通り。

- ・かすり工房さいとう（訪問日 5 月 15 日）
- ・富岡製糸場（訪問日 5 月 16 日）
- ・群馬県立世界遺産センター（訪問日 5 月 16 日）
- ・群馬県立歴史博物館（訪問日 8 月 19 日）
- ・伊勢崎織物会館（訪問日 10 月 13 日）
- ・伊勢崎市立赤堀歴史民俗資料館（訪問日 11 月 6 日）
- ・田島弥平旧宅、田島武平家（桑麻館）（訪問日 12 月 3 日）
- ・ちちぶ銘仙館（訪問日 1 月 8 日）

たくさんの方々にご協力いただきました。この場をお借りして感謝致します。

参考文献

- ・松田昇『倭文織と倭文神社』（上毛新聞社出版局・2005）
- ・伊勢崎市制四十周年記念事業実行委員会『伊勢崎市制四十周年誌』（伊勢崎市役所・1981）
- ・里中満智子『まんが伊勢崎の歴史』（伊勢崎市・1995）
- ・桐生市 桐生市の景観に関するアンケート 調査結果（閲覧日 1 月 25 日）